

「中國現代文學史」と三〇年代文藝の評價

寛 文 生

一

解放後の中國で、それまではまったくといってよいほど顧りみられることのなかった自國の現代文學史を大學で教えることが義務づけられて以來、多くの「中國現代文學史」が出版されてきた。その間、一九五五年の胡風批判、五七年の反右派鬭爭など、いくたの鬭爭や論爭を経過しつつ、作家や作品の評價はゆれ動き、たえず修正が加えられてきたが、このたびのプロレタリア文化大革命によって、既成の現代文學史に根本的な書き直しが要求されることは、もはや決定的となった。解放後の文藝界を一貫して指導してきた周揚、特にかつての論敵であった胡風や馮雪峰を追放してからはいっそうゆるぎない地歩を固めたかに見えた周揚が、反黨・反社會主義・反毛澤東の修正主義分子として批判され、その路線が否定された以上、多かれ少なかれ彼の方針にもとづいて、あるいはその指示のもとに書かれてきた文學史が抹殺されるのは、必然のなりゆきであろう。そして周揚の影をぬぐいさった新しい文學史が、いずれ出版されることになるにちがいない。

中國の現代文學史は、五四運動以來、中華人民共和國の成立、そして現在に至るまで、一貫して激しい革命鬭爭の渦中で生成し發展してきたとしてとらえられてきている。自國の封建勢力と闘い、外國の帝國主義的侵略に抵抗してきた時代、それは

内外の支配者によるきびしい弾壓と殘虐なテロルの時代であった。かかる時代の文學史は、敵の彈壓に對して勇敢にぶつかつていった文學者たちの激烈な思想闘争の歴史であつたといえる。したがつてこの時代の文學史を著わすためには、具體的な論争や作品に對して適確な批判と鋭い分析を可能にする著者の眼が、思想的鍛鍊を経た眼がなによりもまず要求される。とりわけ抗日戦争時代の苦しい地下運動の時期における複雑を極めた文藝面での闘争の歴史に、事實をふまえ資料にあたりながら、適確な照明をあててゆくことは、實際にその歴史を闘つてきた人たちにとつても容易なことではなからう。また一般的にいつて、みずからが歴史の生き證人であることは叙述を容易にすることもあらうが、その逆の場合も十分に考えられる。かつての論敵が今は同志としてともに活躍している場合など、過去の論争の結着がついておらず、したがつてその評價もまだ十分に定まっていまいとなれば、當事者であればあるほど一層書き難くなるのは自然であらう。このたびの文化大革命のなかで、周揚、田漢、夏衍、陽翰笙らが事實をねじまげ、歴史を歪曲したとして激しい攻撃を受けた、いわゆる三〇年代文藝の評價をめぐる問題も、すでに指摘されているように當時における文學者集團のギルド的セクト主義的な争いが、複雑な人間關係とからまりあつて、現在にまで尾をひいていたことは確かである。もちろんこのことを、彼らに對する今次の批判の主要な原因と見る考え方は正しくないであらうし、そうした面からの興味本位的な人間關係をめぐる穿鑿をいくらやってみたとところで、問題の本質にせまることはなかなかできないであらう。すでに數年にわたつてしかも全人民をまきこんだ形での大々的な運動になつてゐるプロレタリア文化大革命が、いくら指導的な地位にあつた人物であるにせよ、單にその過去のあやまちを批判するだけの目的であつたのなら、これほどまで全中國が激動することはなかつたはずである。現在の中國、これからの中國の進み方と大きくかわつてゐるからこそ、中國全人民の問題にされなければならなかつたのに違ひない。日本帝國主義の中國侵略を目前にして、文學者たちが抗日のための統一戦線をいかに組むかをめぐつてまきおこされた論争、いわゆる國防文學論争が、三〇年代文藝評價の重要なポイントになつてゐるのも、中國が現在、國際的な反帝統一戦線をいかに組むか、という深刻な問題と密切にかかわつてゐるからであると思われる。中國における學術研究や文藝論争が、われわれの豫想を超えて、現實の問題と

深くかわりあっていたことは、たとえば呉晗批判のなかで指摘されたさまざまな事実からだけでも、十分にうべなわれるであらう。

解放後二十年、かつてない規模でくりひろげられた今次の思想闘争のなかで、「中國現代文學史」も根底的な批判と検討を餘儀なくされている。われわれもこれを期に、これまでに出た「現代文學史」の問題点を整理検討し、現在の時点におけるわれわれの総括をしておくことは意味のあることであり、それは新しく出現するはずの「現代文學史」を理解するうえでも必要であると考ええる。とはいっても、いきなり十指にあまる「現代文學史」の全般にわたって検討を加えることは、とてもにわかにできることではない。小論ではさしあたって、このたびの文化大革命で一つの焦点になったいわゆる三〇年代文藝、特に「國防文學」をめぐる論争をどのようにあつかってきたかに問題をしばって、各文學史の比較検討を試みることにしたい。この論争のあつかいかたが、各文學史の特徴や性格をある程度象徴的に示していると考えたからである。

以下に挙げるのは、主として解放後に出版された「中國現代文學史」およびそれに準ずる書物のうち、筆者の目睹したもの、またはその存在を知り得たもののリストである。

- A 「中國抗戰文藝史」 藍海 一九四七・九 上海 現代出版社
- B 「中國新文學史研究」 李何林等 一九五一・七 北京 新建設雜誌社
- C 「中國新文學史稿」上下 王瑤 上 一九五一・九 北京 開明書店 五三・七再版 上海 新文藝出版社、下 五三・八 上海 新文藝出版社
- D 「中國新文學史講話」 蔡儀 一九五二・十一 上海 新文藝出版社
- E 「中國現代文學史略」 丁易 一九五五・七 北京 作家出版社
- F 「新文學史綱」第一卷 張畢來 一九五五・十二 北京 作家出版社

- G 「中國新文學史初稿」上下 劉綏松 一九五六·四 北京 作家出版社
- H 「關於中國現代文學」 李何林 一九五六·八 上海 新文藝出版社
- I 「中國現代文學史」上下 孫中田等 一九五七·九 長春 吉林人民出版社
- J 「新文學史講義」 郝御風 一九五八？
- K 「中國現代文學史」上下 復旦大學中文系現代文學組學生集體編著 上 一九五九·七 上海 上海文藝出版社
- L 「左聯時期無產階級革命文學」 南京大學中文系編 一九六〇·三 南京 江蘇文藝出版社
- M 「中國現代文學史」三冊 吉林大學中文系中國現代文學史教材編寫小組 第二冊 一九六〇·四 長春 吉林人民出版社
- N 「中國現代文藝思想鬭爭史」 復旦大學中文系一九五七級文學組學生集體編著 一九六〇·五 上海 上海文藝出版社
- O 「中國現代文學史(初稿)」 北京大學中文系集體編著 一九六〇·五
- P 「中國現代文學史(初稿)」 山東師範學院中文系編著 一九六〇·七
- Q 「中國近四十年文藝思想鬭爭史」 四川大學中文系 一九六〇
- R 「中國現代文學史」第一卷 中山大學中文系 一九六〇
- S 「中國當代文學史」 南開大學中文系 一九六〇
- T 「十年來的新中國文學」 中國科學院文學研究所編 一九六三·十一 北京 作家出版社
- U 「中國現代文學史參考資料」 中國人民大學新聞系編寫 一九五八·六
- V 「中國現代文學史參考資料」三卷 北京師範大學中文系現代文學教學改革小組編 一九五九·三、五 北京 高等教育出版社

中華人民共和國成立の翌年、一九五〇年五月に教育部が召集した全國高等教育會議で、「高等學校文法兩學院各系課程草案」が討論され、「中國現代文學史」が各大學の中國語文系の主要な課程のひとつに定められた。そしてその翌年の五月には、「中國新文學史教學大綱（初稿）」が、老舍、蔡儀、王瑤、李何林らの手によって作られた。リストの最初にあげたAは、この教學大綱の末尾にある「教員參考書要（初稿）」のなかの歴史の部分に名の出ているものである。Bには、冒頭に教學大綱がかかげられ、そのあとに、各時期の重要な問題點五項目について、李何林、張畢來、丁易による論文が編まれている。おそらく全國各大學で教える現代文學史の參考に供するものとして、急ぎ出版されたものであろう。かくして、その後全國各大學の講義案をもとにした現代文學史が續々と出版されていった。Cは清華大學、北京大學での講義案がもとなったものであり、Dは華北大學第二部での連續講演の速記、Eは國內各大學、Fは東北師範大學と華東師範大學、Gは武漢大學、Jは西北大學での講義案、またIは東北師範大學の通信教育用講義案がそれぞれもとなっている。KとNは一九五八年ごろから全國各大學ではじまった學生の集體編著による成果であり、MとVは教師の方のそれである。L、O、P、Q、R、Sも、學生や教師の集體編著によるものであろう。Hは李何林が解放後に書いた論文と講演の記録を集めたものであるが、文學史の各時期にわたって述べられているので、ここに併記した。SとTは解放以後の文學史である。

筆者は、上記二十二種の各文學史のうち、Iの下、J、Kの下、L、Mの第一、三冊、N、O、P、Q、R、S、Uは見る事ができなかった。これらのうちの多くは内部發行として、一般にはおそらく市販されなかったものと思われる。ここにその名を挙げたのは、新聞や雑誌の書評や紹介記事から氣のついたものを拾ったにすぎず、實際にはこれ以外にもっと出版されているに違いない。邦譯されたものとしては、Cが實藤惠秀氏等により「現代中國文學講義」の名で一九五五、六年に五冊として河出書房から（この翻譯には、著者の日本語譯への序文および著者からの指示による改訂や削除が加えられている）、またDが金子二郎氏により一九五五年に法律文化社からそれぞれ出ている。なお近年になってTとVは大安から、BとCは香港からそれぞれ復印されて、手に入りやすくなった。またLが近く汲古書院から影印されることであるが、この論文には間にあわなかった。

二

いわゆる國防文學論争については、周揚批判以來、わが國でもさまざまな文章が發表されているので、ここに改めて紹介するまでもないことであるが、議論を進める都合上、まずごく簡単にその経緯を述べておく。一九三一年のいわゆる滿洲事變以來、日本帝國主義の中國侵略策動がますます露骨になってくるなかで、蔣介石は日本と妥協を重ねながら、その主な勢力を共產軍の討伐に向けていた。これに對し、井崗山を出發して長征の途上にあつた中國共產黨は、一九三五年八月、内戰停止、一致抗日を主張する「八・一宣言」を發表し、廣汎な抗日民族統一戰線の結成を全中國人民に提唱した。周揚らの指導する上海文化界の黨組織は、これをうけて翌三六年の春、それまでの「左翼作家聯盟」を解散し、あらたに「國防文學」のスローガンをかけ、より廣汎な層を集める組織として六月に「中國文藝家協會」（加盟者百十一人）をつくった。これに對し、魯迅らのグループは「民族革命戦争の大衆文學」というスローガンを提起し、七月には「中國文藝工作者宣言」を發表。この署名に加わつた七十七名のうち六十五名が「中國文藝家協會」に加盟していなかつたこともあつて、雙方が、二つのスローガン、二つの組織をめぐつて激しい論戦を展開した。そしてその秋、このまま論争を續ければ、損をするのは自分たちだけで、得をするのは敵であるとして、「文學界の二つのスローガン問題は休戦すべきである」と陳伯達が呼びかけ（九月十六日）、さらに十月十九日、一方の旗手であつた魯迅が病死してしまつたことによつて、論戦は一應終止符が打たれたのである。

それからちょうどまる三十年たつた一九六六年四月十八日、「毛澤東思想の偉大な赤旗を高くかけ、社會主義文化大革命に積極的に参加しよう」という、このたびのプロレタリア文化大革命の進軍ラッパとなつた「解放軍報」の社説によつて國防文學派は激しい攻撃を受けることになつた。

いわゆる三〇年代文藝に對する迷信は打破されなければならない。當時、左翼文藝運動は、政治的には王明の「左」翼日

和見主義路線であり、組織的には閉鎖主義的セクト主義的であつた。……三〇年代にはよいものもあつた。それは魯迅をはじめとする戦闘的な左翼文藝運動である。三〇年代の後期になつて、當時左翼のある指導者たちは、王明の右翼投降主義路線の影響の下に、マルクス・レーニン主義の階級觀點にそむいて、「國防文學」というスローガンを提起した。このスローガンはブルジョアジーのスローガンである。これに對し「民族革命戦争の大衆文學」というプロレタリアートのスローガンは、魯迅が提起したものである。（この社説が、その二カ月前に開かれていた「林彪同志が江青同志に委託して開いた部隊文藝工作座談會紀要」にもとづくものであることは、一年あまりのちに明らかにされた。「人民日報」一九六七・五・二十九、「紅旗」第九期。）

そして中國共產黨成立四十五周年にあたる七月一日、黨中央委員會主編の雜誌「紅旗」第九期に載せられた阮銘・阮若瑛の「歴史を顛倒させた周揚の一本の暗箭——「魯迅全集」第六卷の一條の注釋を評す」や、穆欣の「國防文學」は王明の右翼日和見主義路線のスローガンである」などによつて、周揚がついに名指しで批判を受けるようになったことは、衆知の通りである。

では、この二つのスローガンをめぐる三十年前の大論戰を、これまでの文學史は、いったいいかなる觀點からどのように説明し、評價して來たのだろうか。以下、出版された順序にしたがつて、各文學史の要點を紹介しつつ、その問題點を考へてゆくことにしたい。

三

まず李何林らが「中國新文學史教學大綱」の末尾で参考文献に挙げた解放前の著作、藍海の「中國抗戰文藝史」(A)から検討してゆくことにする。藍海はまず、二つのスローガンが激烈な論戰を引き起したことを述べたあと、次のようにいう。

三十年にわたる新文學運動以來、新しい論爭には、常に多かれ少なかれ怨恨がからんでいた。今度ももちろん例外ではあ

り得ず、ギルド意識、セクト主義の害毒を十分に見せつけたのである。しかしながら、結局いくつかの問題は、この論戦によって結論が得られた。魯迅の「徐懋庸に答え、併せて抗日統一戦線の問題について」が發表されてから、問題はますますはつきりとした。

藍海は、このあと、魯迅の文章をつなぎあわせて、みづからの結論と説明に代えている。ここで引かれているのは、原文でも圈點をつけているところが多く、以後の文學史でもよく引かれるところであつて、魯迅の立場を明らかにしているだけでなく、論點もはつきり示していると思われるので、少し長くなるが、以下にその譯文をかかげることにする。『』の部分が魯迅の原文である。

彼はいう、『民族革命戦争の大衆文學』というスローガンを提起したのは、『これまでプロ革命文學にとらわれていた左翼作家たちを動かして、抗日の民族革命戦争の前線に馳せ参じさせるためであり、それは、『國防文學』という名詞そのものの文學思想としての意味におけるあいまいさを補い、また『國防文學』という名詞にくつつけられた若干の不正確な意見を是正するためである……。』それは『主として進歩的な、これまで左翼といわれてきた作家たちに呼びかけたのであり、これらの作家たちが、努力して前進することを希望する。』では『國防文學』はどうか。彼は次のように考える。

『當面の文學運動の具體的なスローガンの一つであるのは、『國防文學』というスローガンがかなり一般向きで、すでに多くの人びとの聞き慣れたものだからである。それはわれわれの政治的また文學的な影響をひろげることができるし、そのうえそれは、作家は國防の旗の下に連合するとも、廣義の愛國主義の文學であるとも解釋できるからである。したがってそれはたとえ不正確に解釋されたことがあったにせよ、それ自體のもつ意味に缺陷があるにせよ、存在すべきである。なぜなら存在することが抗日運動に利益となるからである。』この理論は『文藝家の抗日問題での連合は無條件である、漢奸でないかぎり、抗日を願ういは抗日に賛成するかぎり、兄よ妹よであろうが、御座候であろうが、あるいは鳥よ蝶よであろうが、いっさいさしつかえない』という主張から出ている。したがって彼はいう、『作家は『抗日』の旗、あ

るいは「國防」の旗の下に連合せよというべきであって、作家は「國防文學」のスローガンの下に連合せよ、ということ
はできない。なぜなら「國防を主題とする」作品を書かなくても、いろいろな面から抗日の連合戦線に参加できる作者も
いるからである。』ここで國防文學は創作のスローガンではないという問題も附帶的に説明されている。

以上が、第二章「新文藝發展の方向」のなかの「二つのスローガン」に關する藍海の叙述のすべてである。國防文學派の見
解をまったく紹介しなかったのは、この論争に二頁足らずしか割けなかった紙數の都合もあつたろうが、やはり魯迅がその死
の直前に最後の力をふりしぼって書いた長文の戰鬪的な主張がこの論争の結着をつけるものであつたと考え、國防文學派を非
と判斷したからにほかならない。ところが十年後にこの魯迅の文章が、實は反黨分子馮雪峰の代作であつて、當時の上海地下
黨組織——國防文學派に對する惡意ある非難と中傷に満ちているとして、その評價がひっくりかえつてしまうようなことになろ
うとは、藍海も豫想できなかったにちがいない。だが先走るのはやめ、まずは順を追つて見てゆくことにしよう。

解放後すぐに李何林らのつくつた「中國新文學史教學大綱（初稿）」（B所收）では、國防文學論争は第三編「『左聯』成立前
後十年（一九二七—三七）」の第五章「救亡文藝と抗日民族統一戰線運動」であつかわれることになっている。

第一節 「九・一八」「一・二八」後の救亡文藝

第二節 「國防文學」論者の主張

第三節 「民族革命戰爭の大衆文學」論者の意見

第四節 抗日民族統一戰線の初歩的成立

これだけから見れば、兩者の主張を節を分けて平等にあつかうよう指導しているかのごとくである。一方を主張とし、もう
一方を意見としたのは、意見の方がはじめの主張に對する批判という形で出てきたからである。しかし、この大綱作製の中心
になつた李何林の考えがはつきり魯迅の側にくみしていたことは、一九五一年に中央文學研究所でおこなつた「左聯成立前後
十年の新文學」と題する彼の講演の筆録（B所收）を読めばすぐにわかる。李何林は、論争の経緯をごく簡単に説明したあと、

次のようにいう。

人びとの説明からは、二つのスローガンの主たる内容は、実際にはほとんど同じであるが、われわれが今日から見てみると、「國防文學」のスローガンはやはり「民族革命戦争の大衆文學」に及ばないところがある。後者は今日でもなおまちがってはいなかったと言うことができる。「國防文學」論者には、その時は閉鎖主義とセクト主義の偏向があった。魯迅は當時すでに「國防文學」というスローガンの存在を否認してはいないこと、「民族革命戦争の大衆文學」は左翼の作家に出された要求であることを、説明していた。……一九三六年八月に、魯迅先生の萬言の書「徐懋庸に答え、併せて抗日統一戦線の問題について」が發表されて、論争は基本的に終りを告げた。……

李何林の考えは、この時から二年後の一九五三年十二月十五日に中國作家協會文學講習所でおこなった講演「左聯時期の社會主義現實主義の成長」（H所收）においても同じような口調ながら一層はつきりと述べられている。

しかし雙方の説明では、意見は基本的に同じであり、どちらも文藝は抗日救亡のために奉仕しなければならないと主張している。だが今日から見れば、國防文學のスローガンは確かに漠然としており、階級性も明確でない。魯迅先生は完全にプロレタリアートの立場に立ち、われわれがいま提唱している民族革命戦争の大衆文學は左翼プロレタリアート革命文學の一發展であり、このスローガンは進歩的な作家に提起されたものである、などといったおられる。

藍海が魯迅の文章を引くことだけによって論争の結論としていたのを、さらに一步を進め、李何林ははつきり國防文學派の非を前面に出していること、閉鎖主義やセクト主義という言葉をも、藍海が論争全體について、つまり兩派を含めるような表現でいっていたのに對し、李何林は國防文學論者の方にのみこの語を冠していることなどの違いは、注意しておくべきであろう。

次に王瑤の「中國新文學史稿」（C）にうつる。この書物は、解放後、個人によってまとめられた最初の本格的な現代文學史として、當時大きな反響を呼んだ。上冊三一八頁、下冊五四八頁に及ぶ大部なもので、その豊富な資料の引用による詳細な記述は、わが國でも驚きをもって迎えられた。國防文學論争に關する部分は、上冊第二編第六章「魯迅の指導の方向」第七節

「文藝界の團結運動」に九頁にわたって述べられている。ここで王瑤は、藍海や李何林のように魯迅の文章や名前だけを出して説明するのではなく、論争の経過を、もう一方の當事者であった周揚の主張や、それに對する郭沫若や茅盾の意見をも紹介しながら、かなり詳しく述べている。そして論争は、魯迅の「徐懋庸に答え、併せて抗日統一戦線の問題について」が發表されて、やっと終りを告げたとし、その文章を相當長く引用したあと、

この文章が發表されてから、論争は明朗化した。しかも魯迅の指摘によつて、一部の人たちの間に残っていたセクト主義、閉鎖主義、理論上の機械論が清算されはじめた。

といい、二つのスローガン問題については、「民族革命戦争の大衆文學」は現在の左翼作家の創作のスローガンとすべきであり、「國防文學」は全國のすべての作家を結びつける旗印である、とした茅盾の文章を引いて結論とし、またセクト主義の克服については、呂克玉（馮雪峰）の文章をこの時期の重要な收穫であつたとして擧げている（上冊は二年後に修訂版が出たが、この節は初版のままである）。

王瑤の文學史に對して出された意見や批判のなかに、資料の羅列に墮しているとか、無原則に他人の批評や作家自身の文章を引用しているとか、かんじんの著者自身の評價があいまいであるとかいったものがある（『中國新文學史稿（上冊）』座談會記錄）。「文藝報」一九五二年二〇號參照が、それはこの一節でもほぼあてはまるであらう。論争の結着を魯迅の「徐懋庸に答え……」にものつてゆくのはA、Bと基本的に同じとして、そこへゆくまでの雙方の主張を一方に偏しないように平等に紹介しようとしているために、兩派の對決點がかえつてあいまいになっているのは否めない。論争激化の原因となつたセクト主義については詳しいが、論争そのものの問題點の分析、たとえば廣汎な統一戦線を作ること、そのなかにおけるプロレタリア階級の指導の重要性など、魯迅のその指摘を含む文章をながながと引用していながら、まったく見過してしまつてゐる。魯迅の「徐懋庸に答え……」が發表されたことにより、論争が明朗化した、という評語などは、さしづめ著者自身の問題のとらえ方のあまさを、もつとも端的に示すものであらう。

蔡儀の「中國新文學史講話」(D)が出版されたのは、王瑤(C)のより一年以上遅れているが、著者の序文によれば、一九四九年、華北大學第二部で何回かにわけておこなった講演の速記を整理したものであって、実際には、教學大綱がつくられるよりも以前のものといえることができる。またこの書は、序文にいうごとく、新文學運動の史實を叙べたものではなく、新文學史上のいくつかの問題を考察したものであって、王瑤のように時代を追って系統的にその發展過程を述べたものでもなく、資料の引用もほとんどない。國防文學論争については、第四講「新文學運動の團結と鬭争」のうちの「抗戰文學前期の團結と抗戰文學後期の變化」のところで、ごく簡単に觸れられているだけである。

この二つのスローガンの争いの實際的な意義は、もとより主として文學の方針を討論することにあつたのだが、そこには古いセクト主義の影響もあつた。したがつて文學の統一戦線がすすめられた初期に、一部の人は中國文藝家協會をおこし、また別の一部の人びとは「中國文藝工作者宣言」を發表した。かくしてもともと團結のためであつたものが、逆に新しい對立をつくりだすことになつたのである。しかし革命情勢のきびしい要求により、共產黨の指導の正しい把握によつて、たちまちセクト主義の殘滓は克服された。……

論争の原因としてセクト主義をあげただけで、論點の紹介も説明も、誰の争いであつたかも、具體的なことは何一つ述べられていない。共產黨の指導云云というのも、それがどういう内容の指導であつたのかも、蔡儀はまったく觸れない。一九四九年、おそらく手もとにほとんど資料などない狀況のもとの講演であつたためでもあろうか。いずれにせよ、セクト主義による二派の對立が、共產黨の正しい指導によつて克服された、という指摘だけではこの論争の内容や意義はほとんど何も理解されないであらう。

丁易の「中國現代文學史略」(E)は、出版社の内容説明によれば、著者が何度か手を入れてきた國內各大學における中國現代文學史の講義案であつて、丁易が一九五四年モスクワ大學で客死したため、著者による最終的な修訂を経ていない未定稿である。ただこの書物が出版される直前に胡風批判のキャンペーンが開始されており、内容説明が、「原稿の本來の面目を尊重するために、編輯校正の時にごくわずかの語句の訂正をした」というのは、主として胡風に關する部分についてのことをいふものであると考えられる。したがつて國防文學論争についても、胡風に關係したところは部分的な削除がおこなわれている可能性がある。

丁易はさきに「中國新文學史研究」(B)で、土地革命時期における文藝運動の問題について書いており、また當時中央文學研究所で四期に分けておこなつた新文學史の報告で、抗戰前期(一九三七—四二)の部分を擔當することになつていたが、朝鮮戰爭に慰問にいつて果せなかつたことが、李何林の文章によつて知られる(B・五〇頁)。なお著者の署名はBでもEでも丁易となつてゐるが、本名は葉丁易である。

この書で國防文學論争をあつかつてゐるのは、第三章第一節「文藝界の抗日民族統一戰線の形成」の三、「『國防文學』と『民族革命戰爭の大衆文學』の論争と魯迅の意見」と題する部分である。丁易の記述で注目すべき點は、二つのスローガンをめぐる論争を、當時の文藝界における統一戰線結成のための原則的な方針をめぐる争いとして、かなりはつきりとらえていることである。すなわち、文藝界における抗日民族統一戰線が、新しい政治情勢のもとで、これまでの「革命文學」の統一戰線には含まれていなかったブルジョアジの作家や舊文學の作家までもつみこんだものでなければならなくなつたこと、その中でどのようにして統一戰線の目標と方針を貫き、抗日救亡の願いをもつすべての作家を團結させてゆくか、という、新しくしかも複雑困難な問題をめぐつておこつたのが、二つのスローガンをめぐる論争であることを、この節のはじめに丁易はまず指摘してゐるのである。そして「國防文學」論者の意見を説明したあと、そのスローガンが人民大衆を主體とすべきことを認めてはゐるけれども、スローガンの文字面からみると、民主的盟友的態度で各階級や階層と聯合するように主張してゐるかの

ように見える。そこでスローガンを具體的かつ明確にし、人から誤解されないようにするために、魯迅と茅盾は「民族革命戦争の大衆文學」というスローガンをつくったのである、と述べている。このあたりの丁易の言葉づかいは、大變微妙であるといつてよい。このあと、これまでの書物が引用したように、丁易も魯迅の「徐懋庸に答え……」をかなり詳しく引くが、彼はそのあと更に、「現在のわれわれの文學運動を論ず」を引き、この文章が文藝界の統一戦線の原則的な方針にかかわるものであり、これは當時における極めて重要な指導的意義をもった文件であると強調する。丁易が引用した部分の、さらにその一部をここに引こう。

民族革命戦争の大衆文學は、プロレタリア革命文學の一發展であり、プロレタリア革命文學の現在の時點における眞實にしてより廣汎な内容である。……新しいスローガンの提起を、革命文學運動の停止と見なしたり、「この道ゆきづまり」といったりすることはできない。したがって、これまでのファシズムに反対し、あらゆる反動に反対する血の闘争を停止させるものでは決してなく、この闘争をより深め、より廣げ、いっそう實際的に、いっそうきめこまかくし、闘争を抗日反漢奸の闘争へと具體化させ、あらゆる闘争を抗日反漢奸の闘争という本流に合流させてゆくものである。革命文學がその階級的指導の責任を放棄しようとするものでは決してなく、逆にその責任をいっそう重く大きくし、全民族を階級と黨派の別なく、一致して外にあたるまでに重く大きくさせるものである。この民族的立場こそ眞に階級的立場である。……これを讀めば、國防文學のスローガンが民主的盟友的態度で云云と遠まわしに述べていることの皮肉もはつきりする。

國防文學派の評價についての丁易の言葉づかいは慎重さは、魯迅と茅盾の意見は正しいといったあとで「實際にはこの二つのスローガンの基本原則はすこしも違つてはおらず、どちらも統一戦線のスローガンである」などと筆を曲げ（？）たりさへもさせているが、その論點の指摘や對決點のとらえ方から考えれば、兩派に對する軍配の上げ方は決定的に魯迅の側にあり、これまでのどの文學史よりも説得力をもっているといつてよいだろう。周揚の意見は、そのごく一部を彼の文章の中で引用するだけで、それが周揚の意見であることは二十數頁あとの注を見なければわからないように配慮してあるのも、本文の中で何

度も名前をあげて周揚の文章を引く王瑤のあつかい方とは非常に大きな違いであるといつてよい。また魯迅の「徐懋庸に答へ……」を引用したあとで「これから見ればこの論争における魯迅と茅盾、郭沫若（この時は日本にいた）三人の意見はなんらの違いもなかった。その他の人の論争のある部分はどれもセクト主義の残滓の影響を受けていた……」というのは、あきらかに周揚を完全に無視した表現であるといつてよいだろう。

それはともかく、丁易が二つのスローガンをめぐるこの論争を、統一戦線結成のための原則的な方針をめぐる争いとして、明確に位置づけてその経過を説明し、その観點から魯迅の主張の正しさを評價したこと、セクト主義の問題は論争を激化させただけのむしろ附帶的なものとしてあまり強調しなかったことは、これまでの文學史の論點の不明確さをおぎなつたものとして、特記されるべきことである。

張畢來の「新文學史綱」第一卷（F）にあつかわれているのは、第一次國內革命戦争前後までであり、第二卷以後が出版されたかどうかは不明のため、さしあつて小論のとりあげる對象にはならない。ただ著者の張畢來は、解放直後につくられた「中國新文學史教學大綱」の起草に参加しており、「一九二三年「中國青年」の幾人かの作者の文學主張」（B所收）を書いていることだけを指摘するにとどめておく。

五

丁易の文學史が出た翌年に、同じ作家出版社から劉綬松の「中國新文學史初稿」上下（G）が出版された。この本でまず注意すべきは、出版社による内容説明の次の個所である。

しかし中國新文學史上のいくつかの問題、たとえば左聯時期における創作方法の問題、抗日戦争前夜の文藝界の抗日民族統一戦線運動の中の二つのスローガンの問題などは、まだ歴史的な結論が下されてはいない。本書の論述は、ある違つ

た意見にもとづいて書かれたものであるにすぎず、單に讀者の參考に供せるだけのものである。中國新文學史の研究工作は、現在まだはじまったばかりであり、本書の出版の目的は、わが社が同時に出版した葉丁易の「中國現代文學史略」、張畢來の「新文學史綱」と同じく、ただ文學青年のためにいささか新文學の知識を提供しただけであり、研究工作进行を前進させるためにいささか研究の方法と資料を提供しただけのものである。

かかる指摘が著者でなくて、出版社による内容説明にあることは、少々異常であるといつてよい。事實、劉綏松の二つのスローガンに關する部分の叙述は、丁易のそれとは反對に、國防文學派に同情的に、というよりむしろはつきり國防文學派の立場にたつてなされており、出版社のかかる内容説明がなくても、丁易に對抗して書かれた、あるいは書かせた(?)ものであることは明白である。歴史的な結論がまだ下されてはいないという理由のもとに、解放後はじめて國防文學派の主張を積極的に支持する文學史として出版されたのが、この「中國新文學史初稿」であるといえよう。

劉綏松は、まず二つのスローガンをめぐる激烈な論争と對立があつた事實をできるだけばかし、そうした印象をうすめるための努力をしている。それはまず目次にあらわれている。第三編第一章「白色テロのなかで前進するプロレタリア革命文學」の六「文藝界の抗日民族統一戰線運動」というのが、國防文學論争をあつかつた部分である。丁易は、すでに紹介したように「國防文學」と「民族革命戦争の大衆文學」の論争と魯迅の意見」と題していた。

本文においては、「國防文學」のスローガンを提起した周揚の文章を丁寧引用しつつ、國防文學が創作のスローガンとして出されたものではなく、作家關係の旗印として出されたものであることをしきりに辯明する。しかしこのことは、たとえば王瑤が、矛盾への反論として引用している周揚の文章を見ても、いかに無理なことにつけであるかということは、あまりにもはつきりしている。

わたしは「國防文學」のスローガンは創作活動の指標とすべきであり、それはすべての作家に國防的な作品を書くように呼びかけるものであると考える。…(C上二八〇頁)

劉綏松も同じく周揚の茅盾への反論の文章を引きながら、この部分にはほおかぶりしてしまっているのである。かくして國防文學のスローガンを故意に、それに反對して茅盾が主張した「民族革命戦争の大衆文學」は現在の左翼作家の創作のスローガンとすべきであり、「國防文學」は全國のすべての作家を結びつける旗印である」という結論と同じ方向に理解し説明してしまつた著者は、このスローガンの下に成立した中國文藝家協會の成立宣言を詳細に引用し、そのあとでやつと、この時「國防文學」というスローガンのほかに、別にまた「民族革命戦争の大衆文學」というスローガンが提起された、という表現をしながら、魯迅の「現在におけるわれわれの文學運動を論ず」を引く。しかし、そのあとで劉綏松は次のようにいう。

魯迅が發表した談話から、非常にはつきりと讀みとれるのは、「民族革命戦争の大衆文學」というスローガンの提起は、「國防文學」に反對する意味はみじんもなかったということであり、しかも兩者の間の基本的な要求や闘争の目標も完全に一致していたということである。

このあと、魯迅らの「中國文藝工作者宣言」を引用してまたいう。

これは中國文藝家協會の成立宣言の提起した精神と主張とも、やはり原則上の分歧はみじんもない。

しかし、にもかかわらず熱烈な論争がおこつた。そして八カ月後、魯迅の發表した「徐懋庸に答え……」により、雙方の認識はやつと一致の方向にむかい、論争は終つたとして、魯迅の文章が引かれる（引用部分の比較検討も必要だが、今は繁をいとして省略する）。つまり、もともと兩者の考えは同じだったのであるが、雙方の認識不足や誤解のために熱烈な論争が起つたに過ぎないのであつて、魯迅の文章によつて、その誤解はやつととけたというのである。劉綏松は、この誤解にもとづく論争の原因を、一つは當時の作家たちの閉鎖主義にあつたとして、呂克玉（馮雪峰）の「文學運動のいくつかの問題についての意見」を引く。しかし、彼はここでも一つの操作を行なっている。すなわちここに引かれる部分は、かつて王瑤が引いたのと同じ部分なのであるが、そこから「ゆえに茅盾先生が、彼らは『入場券』が要ると規定したといわれ、魯迅先生が、彼らは『基本的にセクト主義である』といわれたのは、非常に正しく適切な指摘であつた」の部分の削ってしまうことにより、呂克玉の文章では明ら

かに國防文學派に閉鎖主義の缺點を指摘し、その人びとに對してはつきり使われていた彼ら（他們）が、誰を指しているのか、わからなくしてしまったのである。かくして劉綏松は、さらに論争のもう一つの原因が胡風にあったとして、次のようにいう。

彼（胡風）はわれわれ文藝界の抗日民族統一戦線を破壊しようとやっきになり、中から魯迅と黨の文藝工作者（たとえば周揚、夏衍、馮雪峰）との間の關係を挑撥し、革命文藝陣營内部の分裂をつくり出し、みずからの主人である帝國主義と蔣一味のために、一生懸命奉仕したことも、また非常に重要な原因であった。

劉綏松の「中國新文學史初稿」が、わずか一年前に出た丁易の「中國現代文學史略」と一八〇度に近い評價の轉換をやつてのけたこと、それも堂々とはなく小手先の細工を弄することによって、強引な論理のすりかえをし、國防文學論争に對する從來の見方を逆轉させてしまったことの背景には、もちろん胡風批判と、それにともなう周揚の文藝界における指導權の確立という問題があつたことを推測するのは、今となつてはあまりにもたやすいことである。ともあれ、劉綏松の文學史を契機に、これ以後の文學史は、國防文學派、すなわち周揚を辯護する方向へいつそうつきすすんでゆくのである。

東北師範大學の「中國現代文學史」（Ⅰ）は、これまでの文學史とは體例を異にし、叙述の中心を作家論、作品論においている。執筆者の前書きによれば、文學史の主要な内容は作家と作品であるべきだからである。上冊では、はじめに五四から第二次國內革命戦争時期までの文學の歴史を概観したあと、魯迅、郭沫若、茅盾、瞿秋白の四人にそれぞれ一章を與えている。國防文學論争に關するものは、魯迅の章に、原文にして三行の次のような叙述があるのみである。

一九三五年の文藝界における「國防文學」と「民族革命戦争の大衆大學」という二つのスローガンの論争の中で、革命陣營内部にかくれていた反革命分子胡風は、兩面派の手を用いてひそかに破壊活動をおしすすめ、魯迅と黨の親密な關係を破壊しようとしたが、魯迅はその計略にはひっかからなかった。

六

こうしてすべてが反革命分子胡風のしわざにされ、國防文學派が免罪されてゆくなかで、例の「魯迅全集」第六卷（一九五八年四月 北京 人民文學出版社）の注釋が書かれたのである。その詳細は「紅旗」一九六六年第九期の阮銘・阮若瑛の論文「歴史を顛倒させた周揚の一本の暗箭——「魯迅全集」第六卷の一條の注釋を評す」にゆずるとして、「徐懋庸に答え、併せて抗日統一戦線の問題について」の注釋の問題點は二つある。その一は、徐懋庸が魯迅に書いた手紙は、完全に彼個人の誤った行動であつて、當時の中國共產黨の上海文化界の地下組織は事前になにも知らなかったということ。その二は、當時病床にあつた魯迅の返事は實は馮雪峰が起草したのであり、その文中で左聯の指導をしていた一部の黨員作家に對し、セクト主義的な態度をとり、事實にあわない指彈をおこなつたが、魯迅はそれを定稿にする時、當時の狀況からそれらの事實について調査し、確かめることができなかったということである。

これまでの文學史は、そのニュアンスの違いはあれ、劉綏松までも、魯迅のこの文章が出たことにより論争は結着したとともかく説明してきた。しかし論争は胡風の挑撥によるものであつて、兩者の間には基本的な對立はまったくなかつたといつてしまふには、あまりにも魯迅の一文はするどすぎた。自分に都合のよいところだけを引いてごまかそうとしても、その全文を讀んだものには、十分な納得は得られまい。ましてセクト主義の問題を國防文學派に結びつけずに馮雪峰の論文でしめくくろうとすれば、いっそう無理がでてくる。そこへちやうど一九五七年、胡風につづいて馮雪峰が反右派闘争の嵐のなかで反黨分子としてまた批判された。魯迅全集第六卷の注釋は、この機をのがさずこれまでの苦しい説明を一舉にしかも巧妙に解決してしまつたのである。毛澤東によつて「魯迅は中國文化革命の主將である。……魯迅は文化戦線で全民族の大多數を代表して、敵陣に突入した、もつとも正確な、もつとも勇敢な、もつとも斷固たる、もつとも忠實な、もつとも情熱的な、空前の民族英

雄であつた」(新民主主義論)とまで絶讃された魯迅を正面から非難攻撃するわけにはいかない。そこで考えだされたのが反黨分子馮雪峰による代作という苦肉の策だったのである。

かくして「魯迅全集」第六卷が出た翌年に出版された北京師範大學の「中國現代文學史參考資料」第一卷(V)は、「二つのスローガンの論争および胡風馮雪峰の分裂活動」と題して一連の資料を集めたし、また復旦大學の「中國現代文學史」(K)は、さつそくこの注釋の線にそいつつ、さらにそれを發展させて説明を加えたのである。その第二編第七章第一節「文藝界の抗日民族統一戦線の初歩的形成とうちにひそむ敵との闘争」の關係する部分を以下に要約してみよう。

まず國防文學運動こそ黨の統一戦線政策にのつた正しい運動であり、全國に巨大な影響を與えていったことを力説したあと、反黨分子馮雪峰と反革命分子胡風が結託して、二つのスローガン論争をひきおこし、革命文藝運動の分裂を引きおこしたことを述べる。そして魯迅や茅盾は、黨の統一戦線政策に符合するという面から「民族革命戦争の大衆文學」というスローガンを理解し、「民族革命戦争の大衆文學」は今の左翼作家の創作のスローガンとすべきであつて、「國防文學」は全國のすべての作家を結びつける旗印である、とした。しかし魯迅らは、當時まだ馮雪峰や胡風の陰謀に氣づいていなかったのだから、この問題では彼らに責任はない。もしもスローガンについてだけいうなら、彼らの解釋でも正しいのである。馮雪峰や胡風は、當時病床にあつた魯迅先生を、外界から完全に遮斷することによって事の真相をおおいかくし、魯迅先生をだまして周揚や夏衍を攻撃し、一連の反黨活動をおこなつた。自分の意見こそ黨を代表するものであるとして、魯迅先生の信頼をかりとつた馮雪峰は、魯迅の名前を使って「徐懋庸に答へ……」を發表し、病床の魯迅先生をごまかしつつ、多くの事實を捏造し、文藝界の黨員を侮辱し、魯迅先生の意見を見無視して「統一戦線破壊」という「罪名」を魯迅先生にかぶせ、「國防文學」を主張した文章はセクト主義などと攻撃した。それでもまだ足りなかつた馮雪峰は、さらに「文學運動のいくつかの問題についての意見」を書いて、「國防文學」を主張する同志を「セクト主義」であるとか、「閉鎖主義」であるとかののしつたのである……。ここに至つて、その曲筆は極まつたといつてよい。「國防文學」派は完全に正しかつたのであり、「民族革命戦争の大衆文

學”派の主張は胡風や馮雪峰の挑発からおこったにすぎない。晩年の魯迅は彼らにだまされていたのであって、“徐懋庸に答へ……”は魯迅の名をかたった馮雪峰の惡意に満ちた中傷であつた、ということになってしまったのである。なおこの書では、第一編第二章第四節のなかでも「反黨分子馮雪峰の魯迅に對する多方面の汚蔑」（三四頁以下）と題して同様の指摘がある。

復旦大學（K）の翌年に出た吉林大學の「中國現代文學史」（M）では、この論争は、第二章第四節に「馮雪峰を代表とする修正主義との鬭争」といういっそうあらわな題をつけて、Kより簡單ではあるが、ほぼ同じ評價を下している。近く復印されると聞く南京大學の「左聯時期無產階級革命文學」（L）も、穆欣の「國防文學」は王明の右翼日和見主義路線のスローガンである。「紅旗」一九六六年第九期の引くところによれば、「國防文學」は完全に黨の抗日民族統一戦線の政策に合致しており、黨の抗日民族統一戦線政策の文藝戦線における實際の運用であつて、「民族革命戦争の大衆文學」というスローガンは修正主義路線を代表するものである、と述べている。また穆欣の論文によれば、一九六二年十一月に「中國現代文學史討論會」が開かれてゐる。だがその詳細については、當時の新聞や雑誌には發表されなかつたらしく、ここでどんな問題が討論されたかは、われわれには今のところまだ知る手がかりがない。

七

以上、解放後に出版された各種の「中國現代文學史」總括の一過程として、國防文學論争評價の變遷を考察してきた。もちろん嚴密には、これらの「中國現代文學史」が書かれる下地を作つた胡風や馮雪峰、徐懋庸批判の諸文獻、魯迅に關するさまざまな著作、文學史家の諸論文などをも検討しなければならないのはいうまでもないことであるが、紙數に限りのある小論では、すべて割愛せざるを得なかつた。

一九五六年に出版された劉綬松の「中國新文學史初稿」以後、急傾斜で進行した國防文學論争評價の轉換は、歴史事實の歪

曲による書きかえがあることがはつきりした以上、以後の文學史ではすっかり書き改められることになるであろう。しかしこれで問題はすべて解決したわけではない。反革命分子、反黨分子として徹底的にやつつけられた胡風や馮雪峰の當時の諸論文は、はたしてどのように考えるべきなのか、茅盾や郭沫若などのとった態度はどうだったのか、二つのスローガンは休戦すべきであるとした陳伯達の主張は正しかったのか、解放軍報の社説が、國防文學のスローガンはブルジョアジーのスローガンだときめつけたのは、その通りであるのか、そもそも統一戦線を組んでゆく上での原則はどうあるべきなのか、當時の政治情勢に照してみても果してどちらの考えが正しかったのか、二つのスローガンが出された結果としてどういう事態が生じたのか、魯迅が死の床に横たわりながら「聯合戦線」の説が出たとたん、かつて敵に降参した一群の「革命作家」たちが、「聯合」の先覺者づらをしながら、だんだん顔を出してきた。魂を賣り渡して敵に内通した卑劣な行爲が、今になってみると、すべてが「進歩」の輝かしい事業であつたかのごとくである。」（半夏小集「三」）とはきすてるように書いた事實の重みをどう受けとるべきなのか、など、検討すべく残された問題はまだまだ多い。また考えてみれば、あれほど露骨な歪曲が進行していたのに、論争の當事者としてことの真相をよく知っていたはずの茅盾や、魯迅夫人であつた許廣平などがなぜ黙っていたのか、あの時期としては反黨反革命分子の胡風や馮雪峰を大衆的にたたくことの方に重點があつたからなのか、迂濶なことがいえないほどに周揚による有形無形の壓力があつたからなのか、それともまた時期がくるまではじつと隱忍自重していたとでもいうのであるうか、釋然としない疑問もまだまだある。しかし紙數はすでに盡きてしまった。ただいえるのは、中國ではこれらの問題が常に今かかえている問題と密切に結びつけて考えられ、論じられ、解釋されてゆくであろうということである。過去の事實を堀りおこし研究するのは、それを現在に生かすためであり、山がそこにあるから登るという、ただそれだけの學問は無意味なものとして、今後は一層強く意識されてゆくであろう。もちろんその過程には、魯迅の言葉が斷章取義的に現實に都合よく解釋されてゆく場合も出てくるに違いない。それを魯迅はそんな意味で使つてはいなかったといつて、誰かが書齋のすみから文句をいっても、中國の人びとにとっては痛くも痒くもない、という現象がおこるかもしれない。もちろん同じことは逆の場合で

もおこりうる。だが、そのことはしばらくおくとして、われわれ中國研究者が忘れてならないことは、「魯迅の精神とはいったいにか」ということであろう。それを捜し求めるための研究であり、學問であることを、魯迅を研究し、中國現代文學を研究するものは、特に銘記しておかなければならない。それを忘れるならば、今後中國の研究者と意見をかわし、論争をいともうとしても、議論は決してかみあいはいしないであろう。

(一九七〇・二・七)

附 記

○プロレタリア文化大革命以後、わが國で國防文學論争をあつかったもののうち、今村與志雄氏著「魯迅と傳統」(一九六七年十二月 勁草書房)に收める諸論文、丸山昇氏「『周揚批判』問題覚え書き」(一九六七年七月刊「近代中國の思想と文學」所收)、一九三三・六年の「王明路線」をめぐって—國防文學論争と文化大革命I—(一九六八・二「東洋文化」四四)、および今村、丸山兩氏の間でかわされた論争(極東書店「書報」一九六六年五號、六七年一・二・三號)には、特に啓發されるところが多かった。なお丸山氏には「周揚路線の性格を全體としてつかむ」ための基礎作業として編された「周揚著譯論文・周揚批判文獻目錄」(東洋學文獻センター叢刊第四輯 一九六九年三月 東京大學東洋文化研究所附屬東洋學文獻センター)がある。

○參考までに本論では觸れ得なかつた日本で出版された中國現代文學史の目錄を左にかかげておく。

- イ 「中國新文學入門」 島田政雄 一九五二・八 ハト書房
- ロ 「中國現代文學史—革命と文學運動—」 菊池三郎 一九五三・一二 青木書店
- ハ 「中國新文學發展略史」 實藤惠秀・遠 一九五五・一〇 三一書房
- ニ 「中國新文學運動史—政治と文學の交點・胡適から魯迅へ—」 尾坂徳司 一九五七・一一 法政大學出版局
- ホ 「中國近代文學史」 上下 實藤遠 一九六〇・八、一一 淡路書房新社
- ヘ 「續中國新文學運動史—抗日闘争下の中國文學—」 尾坂徳司 一九六五・三 法政大學出版局